

第一幕は、昭和20年12月の東京巣鴨プリズンです。そこに天皇の密使だったと称する長谷川清が登場し、自分は戦犯である、処刑を望むと言ってくるのです。御庭番、隠密、影武者、密使、密偵、スパイ、インテリジェンスなど、権力は様々な秘密の情報網を操作していることをなんとなく知っていましたが、



このお芝居では、昭和天皇の密使として、実在の人物、長谷川清(1883-1970)が登場すると言うのは、想定したことのないものでした。長谷川は海軍大将、台湾総督など、要職を歴任しているのですが、密かに天皇の目、耳、鼻として、世情を正しく知り、天皇に伝える役目をして来たというのです。ところが、戦争終結の決断が遅れ、そのために数百万の死者が出てしまった。A級戦犯として、その責任を負いたいと申し出ます。巣鴨プリズンの係官の

元陸軍中佐は様々な経緯から天皇には責任を問わないことになっていると、この申し出を受け入れようとしません。最初から、設定は私たちにはすでに解決済みになっているかのような事態についての、非常に重大な問答が提示されるのです。二人には奇しくも共通の3日間を過ごした過去がありました。

第二幕は、その7か月前に遡り、昭和20年5月の広島紙屋町さくらホテルでの回想場面に飛びます。ここで移動演劇隊「さくら隊」の舞台稽古が始まっています。戦時下において自由な演劇活動は弾



圧を受け、解散させられました。国威掲揚、国策宣伝という統制のもとに、移動演劇連盟ができて、演劇者たちはこの移動、巡回劇団の中で様々な監視、束縛を受けながら活動を許されていただけです。この「さくら隊」も実在し、丸山貞夫、園井恵子が中心となって活躍していました。(写真はウィキペディアより)



時代背景。史的事実を受けて、井上ひさしの諧謔がさく裂していきます。

「さくら隊」は『無法松の一生』を演目に、稽古しています。この劇団に、時局を探るために、長谷川が、さらに長谷川の行動を監視する立場の元陸軍中佐が、それぞれ身分を偽って、役者志望者として加わります。劇団が宿泊していたさくらホテルの主人は、日系アメリカ人の女性でした。そのため、彼女は特高の監視下にありました。劇団はホテルの女主人を含め、全ての人々を「無法松の一生」の役者として舞台に立たせようとしています。軸は女主人と監視する特高との関係に移り、にぎやかなドタバタを交えた、芝居の演技指導が中心となる楽しい場面になります。

役者は、演技で役の素性、個性、心情、生き様の真髓を、表現しなければ、嘘くさくなります。真実を表現しなければならないのです。けれども当時の人々は、自由な生活、生き方を許されず、言葉が統制され、自らの心情、信条は秘めて生きなければなりません。統制を乱した途端に、生きる場がなくなってしまうのです。こういうガンジガラメの状況の中で、丸山も園井も人間らしい表現を求めて模索し、役者たちに要求していきます。素性を隠している者、非国民視されている者、特高たちは演技することを通して、人間の暮らしや情愛の大切さを感じていくのです。

戦局が厳しくなり、日系アメリカ人の女主人に拘束命令が出た時、役者の一人が特攻隊員として死なざるを得なかった自分の教え子が、両親に秘密裡に書いた遺書を読むのです。「天皇万歳！」と言って死ぬ、それは人間の真実か？全く違う！教え子は最後の最後まで愛する父をオトン、母をオカンと呼び、遺書に書き残しました。人間は自分の自然な心に沿って生きるのが本当に大切で幸せである。国家に生き方を決められてはならない。特高に、日系アメリカ人の女主人が舞台に立つことを認めてほしい、と皆思わずにいられませんでした。けれども時代が時代。思わず陸軍大佐は硬直して職務に戻ります。また、長谷川は自らのルートを探って、彼女を助ける方法を捜すため、その場を去ります。

それから2か月後、広島は原子爆弾を受けました。紙屋町さくらホテルは勿論、広島は死の街となり、「さくら隊」の大半が爆死しました。戦後の巣鴨プリズンに舞台が変わります。長谷川は戦争の責任を問い、担おうとするのですが、元陸軍中佐は「天皇の形を残して日本が生き残りを決着させたのだ」と主張し、噛み合わないままで終わります。舞台は原爆ドームの真下に設定されていました。重いテーマが重複し、咀嚼できないもどかしさがありましたが、庶民の暮らしを舞台に、言葉の妙、リズムの輝き、滑稽な温かみがあって、面白い劇でした。しかも、反戦を訴える「人間劇」とでもいえるものでした。